

博士論文（要約）

論文題目 後期旧石器時代における石器群の  
構造変動と居住行動に関する研究

氏 名 富樫 孝志

## 目次

### 第1章 研究史と本稿の目的

第1節 本稿の目的と研究戦略	1
1 研究史と問題点の抽出	1
2 準備作業	1
3 主要石器群の再検討	2
4 構造変動に基づく新編年への転換	2
5 各段階での行動の復元	2
第2節 日本における旧石器時代の行動論研究	3
第3節 磐田原台地の概要	4
第4節 磐田原台地における旧石器時代研究史	7
第5節 諸概念の整備	9
1 要素還元主義的研究の限界	9
2 行動を制御するシステムとしての概念	10
第6節 石器分類体系の再編	21
第7節 磐田原台地の古環境復元	23
1 植物相	23
2 動物相	24
3 石材環境	25
4 磐田原台地の地形発達史	26
5 磐田原台地周辺の旧地形復元	29

### 第2章 主要石器群の再検討と問題点の抽出

第1節 寺谷遺跡における2つの集落	35
1 寺谷遺跡における石器群単位の設定	35
2 寺谷遺跡における集落復元の再検討	37
3 寺谷遺跡の形成過程	39
第2節 広野北遺跡の文化層分離	43
1 「尖頭器文化」と「ナイフ形石器文化 (K2)」の関係	44
2 「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」の文化層分離	48
第3節 広野北遺跡の実態	52
1 遺物出土状況の実態	52
2 間層の存在	59
3 年代測定値の検討	66
4 広野北遺跡の「ナイフ形石器文化」文化層分離の結論	67
第4節 エリア区分の問題点	68
第5節 従来編年の問題点	69
1 匂坂中遺跡での時期決定法	70

2	高見丘Ⅲ遺跡における石器群解釈	71
---	-----------------	----

### 第3章 石器群の構造変動と居住行動

第1節	石器群の再構成	74
1	準備作業	75
第2節	台形様石器を含む石器群の構造と運用	78
第3節	AT下位石器群段階の構造と運用	80
1	石器群の構造	80
2	石器群の運用	81
第4節	瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階の構造と運用	83
1	瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階の二極構造の成立	83
2	瀬戸内系石器群・角錐状石器群の台地内適応	85
3	瀬戸内系石器群の消滅	89
4	切出形石器の欠落	90
5	瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階の石器運用	92
6	瀬戸内系石器群と角錐状石器群の諸関係	101
7	角錐状石器群の地点間移動	105
8	不定形剥片系石器群の運用	105
第5節	縦長剥片系石器群段階の構造と運用	108
1	縦長剥片系石器群の概要	108
2	不定形剥片系石器群の認識	111
3	縦長剥片系石器群段階の石器運用	120
第6節	周縁調整・両面調整尖頭形石器の出現と二極構造の崩壊	136
1	周縁調整尖頭形石器の発生	138
2	二極構造の矛盾と終焉	143
第7節	構造変動のまとめ	145
1	年代観	145
2	酸素同位体ステージとの関係	146
3	環境変動と石器群の構造変動	148

### 第4章 石器群の行動論的評価

第1節	瀬戸内系石器群・角錐状石器群の運用評価	150
1	瀬戸内系石器群の石材運用	150
2	角錐状石器群の石材運用	153
3	不定形剥片系石器群の石材運用	153
4	瀬戸内系石器群の管理的運用	153
5	角錐状石器群の管理的運用	154
6	不定形剥片系石器群の便宜的運用	154
第2節	瀬戸内系石器群・角錐状石器群の戦略束	
1	技術組織	154

2	石器製作システム	155
3	道具組織	163
4	リスク低減戦略	166
5	最適捕食行動	167
第3節	縦長剥片系石器群・不定形剥片系群の戦略束	168
1	縦長剥片系石器群の石材運用の評価	170
2	縦長剥片系石器群の居住地選択	170
3	不定形剥片系石器群の石材運用の評価	171
4	縦長剥片系石器群の石器運用の実態	171
5	不定形剥片系石器群の石器運用	173
6	技術組織	176
7	石器製作システム	176
8	道具組織	190
9	リスク低減戦略	191
10	最適捕食行動	192
第4節	両面体調整石器と尖頭器石器群の戦略束	196
1	石材運用	196
2	石器運用	196
3	技術組織	198
4	道具組織	198
5	石器製作システム	199
6	リスク低減戦略	200
7	最適捕食行動	201
第5節	磐田原台地における居住行動のまとめ	201
1	瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階の居住行動	201
2	縦長剥片系石器群・不定形剥片系石器群段階の居住行動	202
第6節	磐田原型居住行動の形成	202
第7節	黒曜石製石器に見る台地外行動とテリトリー	204
第5章	結論	208

## 図版目次

第1図	現在の磐田原台地の地形と遺跡分布	5
第2図	磐田原台地の標準土層	6
第3図	ヌナミウトの道具組織	15
第4図	クーンのプロビジョニングモデル概念図	19
第5図	本稿での石器分類階層図	23
第6図	磐田原台地周辺の地質図	27
第7図	旧地形復元に関するデータ1	28
第8図	天竜川平野縦断面図	30
第9図	旧地形復元に関するデータ2	31
第10図	旧石器時代の地形復元図	34
第11図	寺谷遺跡の遺物分布図	36
第12図	寺谷遺跡の原石搬入に関する個体の分布	38
第13図	寺谷遺跡出土の石核	41
第14図	広野北遺跡「尖頭器文化」「ナイフ形石器文化 (K2)」の石器分布	45
第15図	広野北遺跡出土の尖頭器	45
第16図	広野北遺跡概報の記載	49
第17図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化 (K2)」ブロック3	51
第18図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化」の石器分布全体図	52
第19図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化 (K2)」で報告されたブロック	54
第20図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化 (K3)」で報告されたブロック	56
第21図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化 (K2)」の礫群	58
第22図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化 (K3)」の礫群	60
第23図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化」の遺物出土状況	61
第24図	広野北遺跡「ナイフ形石器文化」の遺物出土レベル差分布	62
第25図	匂坂中遺跡における2つの石器群	71
第26図	高見丘Ⅲ遺跡の石器分布	72
第27図	高見丘Ⅲ遺跡の出土石器	72
第28図	瀬戸内概念と該当石核	75
第29図	匂坂中遺跡ブロックA21の石器	77
第30図	台形様石器を含む石器群	78
第31図	磐田原台地におけるAT下位の可能性がある石器群	80
第32図	磐田原台地における初期段階の瀬戸内系石器群・角錐状石器群	84
第33図	磐田原台地における展開期瀬戸内系石器群・角錐状石器群	87
第34図	切出形石器と角錐状尖頭器の相似	90
第35図	瀬戸内概念を適用した石核製作を示す接合資料	93
第36図	瀬戸内概念を適用した剥片剥離を示す接合資料	96
第37図	広野北遺跡個別別資料K2-3F①	97
第38図	匂坂中遺跡と広野遺跡の瀬戸内系石器群	97

第 39 図	静岡県出土の瀬戸内系石器群・角錐状石器群関連資料	102
第 40 図	板状剥片を利用した不定形剥片石核の製作	107
第 41 図	長者屋敷北遺跡の石器群	110
第 42 図	坂上遺跡と高見丘IV遺跡ブロック 7 の石器群	112
第 43 図	高見丘III遺跡エリア 3 の石器群	115
第 44 図	匂坂中遺跡ブロック B71 の石器群	116
第 45 図	高見丘III遺跡の接合資料	116
第 46 図	山田原II遺跡周辺の遺跡分布・地形図	119
第 47 図	山田原II遺跡の石器	121
第 48 図	原石搬入を示す接合資料	123
第 49 図	寺谷遺跡における縦長剥片剥離	124
第 50 図	高見丘III遺跡ブロック 4 における縦長剥片剥離	126
第 51 図	高見丘III遺跡エリア 3 の出土石器	128
第 52 図	広野北遺跡 K2- ブロック 3 における不定形剥片剥離	130
第 53 図	匂坂中遺跡ブロック C79 の石器	132
第 54 図	匂坂中遺跡ブロック C78 の石器	133
第 55 図	匂坂上 5 遺跡の石器群	135
第 56 図	磐田原台地の両面体調整石器	137
第 57 図	周縁調整尖頭形石器の発生過程	139
第 58 図	瀬戸内概念適用の石核から剥離された横長剥片	140
第 59 図	匂坂上 6 遺跡の石器群	144
第 60 図	磐田原台地における石器群の変遷	146
第 61 図	高見丘IV遺跡ブロック 5、8 の石器	147
第 62 図	瀬戸内系石器群と角錐状石器群の道具組織	166
第 63 図	的場遺跡出土の接合資料	174
第 64 図	高見丘 I 遺跡、寺谷遺跡の接合資料	177
第 65 図	高見丘IV遺跡の不定形剥片剥離を示す接合資料	178
第 66 図	高見丘 I 遺跡の接合資料	180
第 67 図	縦長剥片剥離の難易度を示す接合資料	182
第 68 図	高見丘IV遺跡の原石搬入を示す接合資料	185
第 69 図	長者屋敷北遺跡の接合資料	186
第 70 図	縦長剥片系石器群段階の道具組織	188
第 71 図	磐田原台地上の湧水地と石材搬入地点	193
第 72 図	匂坂中遺跡の石器分布	195
第 73 図	広野北遺跡と山田原II遺跡の両面調整尖頭形石器関連資料	197
第 74 図	両面体調整石器台頭に伴う道具組織の移行	197
第 75 図	高見丘 I ~IV 遺跡周辺の地形	200
第 76 図	高見丘III遺跡と治部坂遺跡の黒曜石製石器	206
第 77 図	三方原台地の旧石器	206
第 78 図	磐田原台地をめぐる 「磐田原型居住行動」	208

## 挿表目次

第1表	遺跡一覧	6
第2表	信頼性システムと保守性システムの比較	16
第3表	フォレイジャーとコレクターの比較	18
第4表	広野北遺跡の年代測定値	65
第5表	向田A遺跡のニセローム層中炭化物の年代測定値	65
第6表	広野北遺跡の熱ルミネッセンス年代	65
第7表	高見丘 I～IV遺跡の年代測定値	65
第8表	磐田原台地における瀬戸内系石器群・角錐状石器群	86
第9表	瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階のシステム評価	160
第10表	縦長剥片剥離技術と不定形剥片剥離技術のシステム評価	187

本稿は出版済みであるため、本文のインターネット公開を差し控える。

書誌事項

著者名 富樫孝志

題名 後期旧石器時代石器群の構造変動と居住行動

出版社 株式会社 雄山閣

出版年 2016年

ISBN 978-4-639-02411-8 C-3021



## 参考文献

- 赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980『日本の旧石器』立風書房
- 赤澤威 1983『狩猟採集民の考古学』海鳴社
- 阿子島香 1995「ドゥフォーール岩陰の彼方に - 石器群の空間分布と人間活動 -」『歴史』第84号:p1 - p29
- 麻生優・小田静夫 1966「静岡県磐田市大藤池端前遺跡」『人類学雑誌』第74巻第2号:p85 - p97
- 阿部敬、岩名建太郎 2010『富士遺跡Ⅰ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 安斎正人 1986a「先史学の方法と理論 渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(1)」『旧石器考古学』第32号:p1 - p10
- 安斎正人 1986b「先史学の方法と理論 渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(2)」『旧石器考古学』第33号:p1 - p16
- 安斎正人 1986c「先史学の方法と理論 渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(3)」『旧石器考古学』第34号:p1 - p15
- 安斎正人 1986d「先史学の方法と理論 渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(4)」『旧石器考古学』第35号:p1 - p16
- 安斎正人 1990『無文字社会の考古学』六興出版
- 安斎正人 1994『理論考古学』柏書房
- 安斎正人 2007「『ナイフ形石器文化』批判 - 狩猟具の変異と編成(前編)」『考古学』第V号:p1 - p32
- 安斎正人 2008「『ナイフ形石器文化』批判 - 狩猟具の変異と編成(後編)」『考古学』第VI号:p119 - p135
- 池田俊雄 1964「東海道における沖積層の研究」『東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』第60号:p1 - p85
- 池谷信之 1991『広合遺跡(e区)・二ツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 池谷信之 1995『土手上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 伊藤和彦、高野穂多果、中村雄紀、杉山和徳、佐々木富士子 1999『桜畑上遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 伊藤通玄 1996「2. 石器および礫群礫の材質とその供給源」『匂坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ』磐田市教育委員会:p19 - p25
- 伊藤幸雄 1992『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下巻』財団法人浜松市文化協会
- 稲田孝司 1995「日本旧石器時代研究における二、三の問題」『展望考古学』:p10 - p16
- 岩淵洋・笹原昇・吉岡真一・近藤忠・浜本文隆「遠州灘沖の変動地形」『地質学雑誌』第97号第8巻:p621 - p629
- 大下明 1989『匂坂上4遺跡発掘調査報告Ⅱ』磐田市教育委員会
- 大村至広 2011『匂坂中下4遺跡』磐田市教育委員会
- 小野 昭 1975「先土器時代石材運搬論ノート」『考古学研究』第21巻第4号:p17 - p19, P33
- 織笠昭 1987「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』第72巻第4号:p1 - p38
- 織笠昭 2002「先土器時代文化2002」『長野県考古学会誌』第99・100号:p3 - p32
- 織笠昭 2000「茂呂系ナイフ形石器の形態学的一考察」『石器に学ぶ』第3号:p145 - p194
- 海上保安部水路部 1992「5 - 12 遠州灘沖の海底地形について」『地震予知連絡会解会報』第45号:p5 - p12
- 海上保安部水路部 2003「5 - 14 御前崎沖の海底変動地形」『地震予知連絡会解会報』第70号:p5 - p14
- 核燃料リサイクル開発機構 1999『わが国における高レベル放射性廃棄物地層処分の技術的信頼性 - 地層処分研究開発第2次取りまとめ 分冊1 わが国の地層環境』
- 角張淳一 1991「黒曜石原産地と消費地遺跡のダイナミズム - 後期旧石器時代石器群の行動論的理解 -」『先史考古学論集』第1集:p25 - p82
- 加藤芳朗 1979「土地条件編」『磐田の自然』磐田市史編纂委員会:p7 - p60
- 加藤芳朗 1980「第1節 磐田原台地の地形・地質概説」「第2節 磐田原土層」『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』:p341 - p346
- 門村浩 1971「Ⅱ 天竜川扇状地の微地形とその形成」『扇状地 - 地理的特性 -』古今書院:p67 - p96
- 鹿又喜隆 2007「細石刃文化期の技術組織の一様相」『考古学ジャーナル』第560号ニュー・サイエンス社:p18 - p23
- 河村善也・亀井節夫・樽野博幸 1989「日本の中・後期更新世の哺乳動物相」『第四紀研究』第28号第4巻:317-326
- 河村善也・松橋義隆 1989「静岡県引佐町谷下採石場第5地点の後期更新世礫堆積物とその哺乳動物相」『第四紀研究』第28号第2号:p95 - p102

- 河村善也 2010 「五 更新世の哺乳類」『講座日本の考古学 1 旧石器時代 上』青木書店 :p178 - p195
- 北川恵一・石川治夫 1982 『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』沼津市教育委員会
- 絹川一徳 1988a 「国分台遺跡における石器製作技術構造 - 原産地遺跡間の比較を通して - (上)」  
『考古学研究』第 35 巻第 1 号 :p32 - p60
- 絹川一徳 1988b 「国分台遺跡における石器製作技術構造 - 原産地遺跡間の比較を通して - (下)」  
『考古学研究』第 35 巻第 2 号 :p68 - p89
- 絹川一徳 2010 「近畿地方における角錐状石器の展開について」『九州旧石器』第 15 号 :p113 - p128
- 木村弘之 1992 『道東古墳群』磐田市教育委員会
- 木村弘之 2000 『大土居古墳群・匂坂上 10 遺跡』磐田市教育委員会
- 木山泰嗣 2009 『究極の思考術』法学書院
- 口蔵幸雄 2000 「最適採食戦略 - 食物獲得の生態行動学 - 」『国立民族学博物館研究報告』第 24 巻第 4 号  
:p767 - p872
- 国武貞克 2002 「旧石器時代の領域分析 - 特定共時における‘戦略束’ - 」  
『東京大学考古学研究室研究紀要』第 17 号 :p1 - p68
- 国武貞克 2003 「両面調整体石器群の由来 - 関東地方 V 層・IV 層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性 - 」『考古学』第 1 号 :p52 - p77
- 国武貞克 2005 「後期旧石器時代前半期の居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』第 78 号 :p1 - p25
- 国武貞克 2007 「第 7 章 石材と行動」『ゼミナール旧石器考古学』同成社 :p129 - p144
- 国武貞克 2008 「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』第 4 号 :p83 - p98
- 国武貞克 2011 「石材開発領域から見たナイフ形石器」『石器文化研究』第 16 号 :p83 - p85
- 久野正博 1998 『平成 9 年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書 - 芝本遺跡 D 地点・梶池遺跡』浜北市教育委員会
- 古環境研究所 2013 「第 1 節 高見丘遺跡群における自然科学分析」『高見丘遺跡群発掘調査報告書』下巻  
磐田市教育委員会 :p1029 - p1050
- 国土交通省中部地方整備局 2009 『天竜川・菊川 川の流れと歴史のあゆみ』
- 国土地理院 1977 「4 - 12 東海地方の変動地形調査 (1)」『地震予知連絡会会報』第 17 号 :p116 - p125
- 国土地理院 1982 『土地条件調査報告書 (遠州地区)』
- 国立防災科学技術センター 1973 『第四紀地殻変動図説説明書 (概要)』
- 近藤錬三・佐瀬隆 1986 「植物珪酸体, その特性と応用」『第四紀研究』第 25 巻第 1 号 :p31 - p63
- 酒井俊彦 2013 『西牧野遺跡』公益法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 佐口節司 1989 『坂上遺跡・藤上原 3 遺跡』磐田市文化財保存顕彰会
- 佐口節司・室内美香・竹内直文・角張淳一 1995 『梵天古墳群・匂坂中下 4 遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 佐口節司・川口安曇 1996 『匂坂下原古墳群・匂坂上 5 遺跡』磐田市教育委員会
- 佐口節司・竹内直文・室内美香・谷口安曇 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 佐口節司・大村至広 2009 『遠州広域水道用水供給事業寺谷浄水場築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
磐田市教育委員会
- 佐々木憲一 2012 「日本考古学の方法論」『考古学研究』第 59 巻第 3 号 :p23 - p31
- 笹原芳郎 1999 『西洞遺跡 (b 区 - 1) 発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 笹原千賀子 1999 『生茨沢遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 笹原千賀子 2009 『梅ノ木沢遺跡Ⅱ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 笹原芳郎・柴田亮平・富樫孝志 2011 「東海東部の角錐状石器」『九州旧石器』第 15 号 :p135 - p147
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第 73 巻第 3 号 p1 - p37
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤宏之 1995 「技術的組織・変形論・石材需給 - 下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察 - 」  
『考古学研究』第 42 巻第 1 号 :p27 - p53
- 佐藤宏之 2007a 「日本列島旧石器文化の課題」『季刊 考古学』第 100 号雄山閣 :p19 - p22
- 佐藤宏之 2007b 「第 1 章 分類と型式」『ゼミナール旧石器考古学』同成社 :p15 - p31
- 佐藤由紀男・鈴木敏則 1984 『半田山古墳群 A 小支群・半田山Ⅲ遺跡』浜松市遺跡調査会
- 佐藤良二 1995 「静岡県匂坂中遺跡における瀬戸内技法小考」『旧石器考古学』第 50 号 :p16 - p21
- 佐野一夫・齊藤香織 1997 『下滝遺跡群』浜松市博物館

- 沢田敦 2007 「石刃石器群と技術組織研究」『考古学ジャーナル』第 560 号ニュ・サイエンス社 :p11 - p17
- 柴田亮平 2010 『細尾遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 芝野照夫・土屋義人・富谷雄・山本武司 1988 「天竜川扇状地と遠州灘海岸の形成」  
『京都大学防災研究所年報』第 31 号 :p775 - p791
- 清水尚 1996a 『広野遺跡』豊田町（現磐田市）教育委員会
- 清水尚 1996b 『加茂東原Ⅰ遺跡』豊田町（現磐田市）教育委員会
- 清水尚 1997 『加茂東原Ⅲ遺跡』豊田町（現磐田市）教育委員会
- 進藤貴和子 1996 「磐田原台地の石器群編年をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』  
静岡県考古学会シンポジウム実行委員会 :p51 - p52
- 杉山真二 2010 「四 更新世の植生と環境」『講座日本の考古学 1 旧石器時代 上』青木書店 :p156 - p177
- 鈴木香織 1993 「磐田原台地における地形発達」『お茶の水地理』第 34 号 :p97
- 鈴木忠司 1980 『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 鈴木忠司 1984 『先土器時代の知識』東京美術
- 鈴木忠司 1994 『静岡県磐田市勾坂中遺跡群発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 鈴木忠司・竹内直文 1996 『静岡県磐田市勾坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ』静岡県磐田市教育委員会
- 鈴木忠司 1998 「茶臼山 愛知県最初の岩宿時代の調査」  
『「野帳の会」考古学論集 - 久永春男先生頌寿記念 - 』 :p1 - p18
- 鈴木尚 1962 「三ヶ日人骨」『人類学雑誌』第 70 巻第 1 号 :p1 - p20
- 関野哲夫 1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その 2』沼津市教育委員会
- 石器文化研究会 2011 「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何か - 概念と実態を問い直す - 」『石器文化研究』  
第 16 号 :p47 - p136
- 芹沢長介 1986 『旧石器の知識』東京美術
- 高尾好之 1989 『中見代第Ⅰ遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社 :p61 - p102
- 高井冬二 1962 「5. 只木層の脊椎動物化石」『人類学雑誌』第 70 巻第 1 号 :p36 - p40
- 高井冬二・長谷川善和 1966 「岩水寺層の脊椎動物化石」『人類学雑誌』第 74 巻第 3・4 号 :p55 - p67
- 高橋章司 2001 「第 6 章 翠鳥園遺跡の技術と構造」『翠鳥園遺跡発掘調査報告書 - 旧石器編 - 』  
羽曳野市教育委員会 :p192 - p221
- 竹内直文・渡邊武文 2013 『高見丘遺跡群発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 田中二郎 1990 『ブッシュマン』思索社
- 田村隆 1998 「移行の論理 - 石器群のデザイン分析と文化=社会理論」『先史考古学論集』第 7 集 :p1 - p48
- 田村隆 2001 「重層的二項性と交差変換 - 端部整形石器範疇の検出と東北日本後期旧石器石器群の生成 - 」  
『先史考古学論集』第 10 集 :p1 - p50
- 田村隆 2006 「関東地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社 :p7 - p60
- 田村隆 2011 『旧石器社会と日本民俗の基層』同成社
- 田村隆 2012 「ゴミ問題の発生」『物質文化』第 92 号 :p1 - p37
- 鎮西清高 1966 「浜北市岩水寺根堅洞くつの堆積物とその地質年代」『人類学雑誌』第 74 巻第 3・4 号 :p37 - p52
- 堤隆 1997 『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 東海地方第四紀研究グループ 1969 「東海地方の第四紀」『日本の第四系』地学団体研究会 :p299 - p318
- 富樫孝志 1995 「尖頭器文化論」『考古学研究会 40 周年記念論集 展望 考古学』 :p33 - p38
- 富樫孝志 1997 「磐田原台地における旧石器時代の石材採取活動」『研究紀要』第 5 号  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 :p1 - p15
- 富樫孝志 1998 『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 富樫孝志 1999 「磐田原台地における旧石器時代の黒曜石搬入・消費活動」『静岡県考古学研究』第 31 号 :p1 - p11
- 富樫孝志 2002 「茂呂系ナイフ形石器と縦長剥片の形態学的考察 - 高見丘Ⅲ遺跡ブロック 4 出土資料の検討 - 」  
『考古学論文集 東海の路』「東海の路」刊行会 :p1 - p22
- 富樫孝志 2003a 「茂呂系ナイフ形石器の形態学的考察 - 高見丘Ⅲ遺跡内での比較 - 」『山口大学考古学論集』 :p1 - 18
- 富樫孝志 2003b 「茂呂系ナイフ形石器の形態学的考察 - 静岡県寺谷遺跡出土資料の検討 - 」『石器に学ぶ』 :p17 - 50
- 富樫孝志 2004 「茂呂系ナイフ形石器の形態学的考察 - 静岡県広野北遺跡出土資料の検討 - 」

- 『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 20 周年記念論文集』:p53 - p72
- 富樫孝志 2005 「東海地方におけるナイフ形石器文化終末期石器群の変動」『石器文化研究』第 12 号 :p65 - p90
- 富樫孝志 2007 『向田 A 遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 富樫孝志 2008 「向田 A 遺跡におけるブロック間工程連鎖」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 14 号 :p11 - p26
- 富樫孝志 2010a 『的場古墳群・的場遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 富樫孝志 2010b 「高見丘Ⅲ遺跡出土石器群の石材消費行動」『静岡県考古学研究』第 41・42 号 :p11 - p24
- 富樫孝志 2012a 「静岡県磐田原台地における石器ブロックの重複形成」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 26 号  
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室 :p39 - p62
- 富樫孝志 2012b 「静岡県磐田原台地における礫群の初源と様相」『石器文化研究』第 18 号 :p94 - 997
- 外山秀一 1996 「第 4 節 プラントオパールからみた勾坂中遺跡の立地と環境」『勾坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(下巻)  
磐田市教育委員会 :p840 - 848
- 長屋幸二 2011 「東海西部の角錐状石器」『九州旧石器』第 15 号 :p129 - p134
- 日本旧石器学会 2010 『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器学会
- 野口淳 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ層上層段階の遺跡群」『旧石器考古学』第 51 号 :p19 - p36
- 野嶋宏二 2002 「更新世谷下石灰岩裂罅堆積物(静岡県引佐町)の脊椎動物化石」  
『静岡大学地球科学研究報告』第 29 号 p1 - p11
- 橋爪大三郎 1988 『はじめての構造主義』講談社
- 長谷川善和・奥村よほ子・立川裕康 2009 「栃木県葛生地域の石灰岩洞窟堆積物より産出した Bison 化石」  
『群馬県立自然史博物館研究報告』第 13 号 p47 - p52
- パリノサーベイ・金子浩昌 1999 「20. 吉岡遺跡群 C 区 B2L 層礫群出土歯牙について」  
『吉岡遺跡群Ⅸ』財団法人かながわ考古学財団 :p307
- 東村武信 1986 『石器産地推定法』ニューサイエンス社
- 藤野次史 1989 「中部高地における出現期槍先形尖頭器の製作技術に関する一考察」『旧石器考古学』第 39 号 :p31 - p41
- 堀正人 1989 『椿洞遺跡』岐阜市教育委員会
- 松井一明・高野由美子、進藤貴和子、加藤芳郎、山内文、田原豊、日本アイソトープ協会 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』  
袋井市教育委員会
- 松井一明・高野由美子 1994 「第 2 節 山田原Ⅱ遺跡出土のナイフ形石器の編年的位置づけ」『山田原遺跡群Ⅰ』  
静岡県袋井市 :p110 - p118
- 松藤和人 1998 『西日本後期旧石器時代の研究』学生社
- 武藤鉄司 1987 「天竜川下流地方、三方が原・磐田原台地の地質 - 現在の開析扇状地からの解釈 - 」『地質学雑誌』  
第 93 巻第 4 号 :p259 - p273
- 村上哲生 1996 「第 5 節 勾坂中遺跡の流路状地形にみられた珪酸質生物遺骸」『勾坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(下巻)  
磐田市教育委員会 :p849 - p850
- 森先一貴 2007 「角錐状石器の広域展開と地域間変異」『旧石器研究』第 3 号 :p85 - p109
- 森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房
- 山崎克巳 1992 「九 京見塚遺跡」『磐田市史 史料編 1 考古・古代・中世』:p56 - 64
- 山崎克巳 1993 「第 1 章 旧石器の宝庫・磐田原台地」『磐田市史』通史編上巻 :p51 - p109
- 山崎克巳 1997 『勾坂上 2 遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 山下秀樹 1983 『広野北遺跡発掘調査概報』豊田町教育委員会 (※現磐田市)
- 山下秀樹 1985 『静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 吉田英敏 1987 『寺田・日野Ⅰ』岐阜市教育委員会
- 渡辺仁 1985 『ヒトはなぜ立ちあがったか』東京大学出版
- 渡辺仁、遠藤万里、尾本恵一 1962 「三ヶ日只木遺跡と遺物埋没状況」『人類学雑誌』第 70 巻第 1 号 :p21 - p32
- Bamforth, D. B. 1986 Technological efficiency and tool curation. *American Antiquity* Vol. 51 no. 1:p38 - p50
- Binford, L. R. 1977 Forty - seven trips: A case study in the character of archaeological formation processes. In *Stone tools as cultural makers: Change, evolution, and complexity*, R. V. S. Wright (ed.)  
Canberra: Australian institute of Aboriginal studies. :p24 - p36

- Binford, L. R. 1978a Cacheing and secondary field butchering. *Nunamiut Ethnoarchaeology* Academic press New York:p55 - p59
- Binford, L. R. 1978b Evidence for differences between residential and special - purpose sites. In *Nunamiut Ethnoarchaeology* Academic press, New York:p488 - p497
- Binford, L. R. 1978c Dimensional analysis of behavior and structure. Learning from an Eskimo hunting stand. *American Antiquity* 43:p330 - p361
- Binford, L. R. 1979 Organization and formation processes: Looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35:p255 - p273
- Binford, L. R. 1980 Willow smoke and dog's tails: Hunter - gatherer settlement system and archaeological site formation. *American Antiquity* Vol. 45 No. 1:p4 - p20
- Binford, L. R. 1982 The archaeology of place. *Journal of Anthropological Archaeology* Vol. 1 No. 1:p5 - p31
- Binford, L. R. 1983 In pursuit of the past University of California press
- Bleed, P. 1986 The optimal design of hunting weapons: Maintainability or reliability. *American Antiquity* Vol. 51 No. 4:p373 - p747
- Bowers, P. M., R. Bonnichsen, D. M. Hoch 1983 Flake Disposal Experiments: Noncultural Transformation of the Archaeological Record. *American Antiquity* Vol. 48:p553 - p570
- Dansgaard, W. Johnson, S. J. Clausen, H. B. Dahi - Jensen, D. Gundestrup, N. S. Hammer, C. U. Hvidberg, C. S. J. P. Steffensen, A. E. Sveinbjörnsdottir, J. Jouzel, G. B. 1993 Evidence for general instability of past climate from a 250 - kyr ice - core record. *Nature* Vol. 364:p218 - p220
- Fujita Masakatsu, Kawamura Yoshinari 2000 Middle Pleistocene wild boar remains from NT Cave, Niimi, Okayama Prefecture west Japan *Journal of Geoscience* Vol. 43. No. 4, Osaka city University:p57 - p95
- Frison, G. C. 1968 A functional analysis of certain chipped stone tools. *American Antiquity* Vol. 33 No. 2 p149 - p155
- Kobayashi, Kunio. 1963 Epitome of quaternary history of hamamatsu and its environs in central Japan. *Journal of faculty of liberal arts and science*, Shinshu university. part2, Natural science 13:p21 - p53
- Kondo, Megumi. Matsu'ura, Shuji. 2005 Dating of Hamakita human remains from Japan. *Anthropological science* Vol. 113 No. 2:p155 - p161
- Kuhn, S. T. 1992 On planning and curated technologies in the Middle Palaeolithic. *Journal of Anthropological Research* 48:p185 - p214
- Matsu'ura, Shuji. Kondo, Megumi. 2001 Dating of Mikkabi Human Remains from Japan. *Anthropological science* Vol. 109 No. 4:p275 - p288
- Ono Akira. Sato Hiroyuki. Tsutsumi Takashi. Kudo Yuichiro. 2002 Radiocarbon dates and archaeology of the Late Pleistocene in the Japanese Islands. *Radiocarbon*, Vol. 44, 477-494.
- Ralph, J. H. 1991 Experiments on Artifact Displacement in Canyonlands National park. *Utah Archaeology 1991*:p55 - p68
- Whittaker, J. C. 1994 *Flintknapping* University of Texas Press
- Wiessner, P. 1982 Beyond willow smoke and dog's tails: A comment on Binford's analysis of hunter - gatherer settlement system. *American Antiquity* Vol. 47 No. 1:p171 - p178
- Wiessner, P. 1983 Style and social information in Kalahari San projectile point. *American Antiquity* Vol. 48 No. 2:p253 - p276
- Yellen, J. E. 1977 *Archaeological Approaches to the Present* Academic press New York

## 論文の内容の要旨

### 論文題目 後期旧石器時代における石器群の構造変動と居住行動に関する研究

氏 名 富樫孝志

本論文では、従来の日本旧石器時代研究で伝統的に採用されてきた文化系統論・段階論的な研究の視点と方法を排し、近年、世界の先史考古学研究で研究の蓄積が進んでいる行動論的方法に基づき、静岡県磐田原台地を研究対象として、後期旧石器時代における石器群の構造変動と居住形態に関する新たな研究成果を提示した。

磐田原台地では、1980年に寺谷遺跡の本格的な発掘調査報告がなされて以降、広野北遺跡、匂坂中遺跡・高見丘Ⅰ～Ⅳ遺跡などの大規模調査が報告されてきた。この他にも数々の旧石器時代遺跡が調査・報告されており、研究環境は整備されている。寺谷遺跡の調査以降、磐田原台地では旧石器時代の集落復元に主眼が置かれてきたが、資料解釈の点では、寺谷遺跡の調査で提唱された方法が一貫して採用されたため、各所に残された石器群を結ぶ行動ネットワークを解明できない限界があった。本論文では寺谷遺跡以降の調査成果を現在の研究視点から再検討し、新たな行動論的説明・解釈を行うことを目的とした。

第1章では、これまでの研究史を概観し、その問題点を抽出して、従来の文化系統・段階論とは異なる視点（行動論）による研究の必要性を指摘した。一つ目の検討の前提として、まず、資料解釈の諸概念を整備した。そもそも人間の行動を制御するシステムは、観念の中で不可分に統合され、所与のコンテクストに応じてリスクを低減して最適捕食を実現するために機能するとの考えから、リスク低減戦略と最適捕食理論を包括的概念と位置づけ、このシステムを機能させるための個別概念として技術的概念（二極構造論、技術組織、道具組織、信頼性・保守性システム、親和・相似）と行動に関する概念（forager と collector、テリトリー、ブロックの重複形成）を整備した。

二つ目の検討の前提として、石材環境を始め、台地とその周辺に想定される自然環境を復元した。特に旧石器時代の台地周辺地形は、現在とは相当に異なっていたと考えられることから、地質学調査やボーリング調査、海底地形の調査成果から、天竜川平野に分厚く堆積した沖積層を取り除いた地形と、海面が現在より140 m低下した状況を想定し、地形と地理的環境を復元した。

第2章では、当地の研究を規定していた寺谷遺跡の並存集落説、広野北遺跡の文化層分離、匂坂中遺跡以降の調査で採用されたエリア区分を再検討した。

寺谷遺跡の並存集落説については、石器の製作工程順にブロックの形成過程を復元したところ、原石搬入地点と石核搬入地点といった工程の異なる地点に区分できたことから、2つの集落単位ではなく、時間差をもって形成された石器集中部から構成された1つの単位であると解釈した。

広野北遺跡の文化層分離については、「尖頭器文化」とされた文化層は単独の文化層ではなく、「ナイフ形石器文化 (K2)」文化層における尖頭器の集中製作地点であることを指摘した。また、

「ナイフ形石器文化 (K3)」文化層については、意図的な資料操作で作られられた可能性が高いことを指摘し、本稿では広野北遺跡の文化層分離を白紙に戻した。

エリア区分については、異時期ブロックの重複形成と不定形剥片を含む石器群の編年上の取り扱いの観点から再検討の必要性を指摘した。

第3章では、第2章の再検討を受けて、分析の時間的単位となる石器群を定義し、その時間的変遷(編年)を整備した。そして、二極構造論に基づく石器群の構造変動を視点として、以下の石器群と編年的順序を確定した。台形様石器が出現する段階、AT下位の可能性がある石器群の段階、瀬戸内系石器群・角錐状石器群の段階、縦長剥片系石器群・不定形剥片系石器群の段階、これに両面体調整石器が台頭した段階を加えて、石器群の構造変動を検討した。

台形様石器を含む石器群とAT下位の可能性がある石器群は検討できる資料が少なかったが、台形様石器出現期に二極構造が認められることを指摘した。その後、一時石器群が途絶えるが、武蔵野ローム層第VI層段階で再び二極構造を持った石器群が再出現したことを指摘した。

瀬戸内系石器群と角錐状石器群の段階から石器群が展開し始めたが、「瀬戸内概念」の地元石材への適応に限界があり、横長剥片剥離技術は、当初から不定形剥片剥離技術に組み込まれた状態で採用されたため、安定した二極構造を形成できず、短期間で消滅した。また、構造上、不定形剥片剥離技術側の極に位置した角錐状石器群も不安定な二極構造のもとでは発達することなく、瀬戸内系石器群と共に短期間で消滅した。

瀬戸内系石器群・角錐状石器群消滅後、縦長剥片系石器群がその構造上の位置を置換し、縦長剥片剥離技術と不定形剥片剥離技術からなる二極構造が成立し、石器群が最盛期を迎えることになったが、本稿では、これまで瀬戸内系石器群と同時期に位置づけられていた不定形剥片主体の石器群を、縦長剥片主体の石器群と構造上の対極をなす石器群として、縦長剥片主体の石器群と同段階に位置づけ、二極構造に基づく整理的理解を図った。

両面調整石器は、不定形剥片石核として便宜石器の生産に供しながら、自らは管理石器として遺跡間を移動する存在として、管理石器と便宜石器という両極を共存させていることから、二極構造は確実に不安定なものになった。この構造変動によって、縦長剥片剥離技術の衰退が始まり、主要狩猟具が背部加工尖頭形石器から両面調整・周縁調整尖頭器に移行することになった。

上記の検討による石器群の消長と変遷を第44図(本論105頁)にまとめた。

第4章では、石器群の構造変動の原動力は行動の変化にあるとの考えから、各段階での居住行動を、第1章で用意した行動システム論の要素毎に検討し、段階ごとに集団が採用した居住行動の実態を明らかにした。

二極構造成立段階(AT下位)では検討できる資料が少なかったが、台地に入植した集団が、地元石材の円礫を持って、その消費効率を上げる剥片剥離技術を採用して台地内で居住を始めたと推定した。

瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階では、石材 flexibility が大きい状態での cache が主体であったこと、集団の頻繁な移動が伺えたこと、小規模ながら collector を派遣する logistic な行動も見られたことなどから、この段階では資源の予測可能性が低く、集団全体で移動する forager 型の行動が主体であったが、forager 型行動と collector 型行動を組み合わせた「温帯型居住行動」の形成が開始されたと考えられる。

縦長剥片系石器群・不定形剥片系石器群の段階は、磐田原台地で石器群が盛行した時期で、目

前に石材採集地を控えておきながら、地形的制約から石材採集機会が限定されていたことから、台地降下ルートを確認できる台地北端の山田原Ⅱ遺跡に石材を集積し、二次原産地を形成した後、ここから石材を搬出して水源地付近に拠点形成するという forager 型の行動が見られた。そして、拠点では縦長剥片系石器群を量産し、同時に cache を形成するとともに多くの縦長剥片系石器群を搬出していた。そして、縦長剥片系石器群を搬出した先で次位の拠点を形成し、ここでも縦長剥片系石器群を量産・搬出し、その搬出先では小規模な地点が多数形成された。一方、不定形剥片系石器群は、不特定の地点（拠点）で不定形剥片系石器群を製作しながら、拠点、次位の拠点、小規模地点を形成し、縦長剥片系石器群と共に樹枝状に展開する地点構成を形成した。

拠点からの最終的な移動先として、石器製作を伴わない石器搬入のみからなる小規模な石器群が多数残されていたことから、拠点から collector を派遣する logistic な行動が発達したと考えられる。こうした行動システムを採用したことによって、資源探索時間が短縮され、石器製作に必要な時間をより多く確保することが可能となり、狩猟具生産を目的とする縦長剥片剥離技術がさらに発達する相乗効果をもたらした。同時に、製作コストがかかる両面体調整石器を製作し、運用することもできるようになった。両面体調整石器は、自らは管理石器でありながら、同時に不定形剥片石核として便宜石器生産用の素材剥片を供与し、さらに最終的には狩猟具になるという特有の性格を有している。不定形剥片石核と共に可動性に優れた石器のため、縦長剥片剥離技術の衰退と二極構造の崩壊を導くことになった。

ただし、両面体調整石器のみでは主要狩猟具の不足が想定されたため、これが台頭した時期でも logistic な行動は継続され、前段階に成立した forager と collector を組み合わせた「温帯型居住行動」は両面体調整石器の段階でも維持され、その結果多くの遺跡が形成されていった。このように、磐田原台地に入植した集団は、瀬戸内系石器群・角錐状石器群段階で資源開発行動の組織化を模索し始め、縦長剥片系石器群・不定形剥片系石器群の段階になって台地内環境に十分適応し、資源開発行動が精緻化・本格化した。そこに両面体調整石器・尖頭器石器群が台頭し、二極構造を崩壊させる起因となったが、この現象によっても、集団の台地内行動システムには根本的な変化はなかったと考えられる。一方、旧石器時代の石器群は基本的に二極構造を形成し、各石器群が常に同時存在する他の石器群と二極的な相対的位置を保持するという構造によって長期的な安定存続を図ってきたが、そこに二極構造を作らない両面体調整石器が台頭することで、二極構造の崩壊を招いた。実際には、縦長剥片系石器群は縮小しただけで消滅までは至らなかったため、二極構造が完全になくなることはなかったと思われるが、縦長剥片系石器群と不定形剥片系石器群の均衡による二極構造に揺らぎが生じたことは間違いない。そして、両面体調整石器と尖頭器石器群は新たな構造を作ることができなかつたため、存続期間も短く、磐田原台地の資源開発は急激に縮小して細石器石器群の段階に移行した。